

令和4年度 戦争にまつわる体験談

「終戦のあとさき」

安井 弘子さん (89歳)

あと半月余りで終戦という昭和20(1945)年7月、父親代わりの祖父が孤独のうちにこの世を去った。戦争が苛烈さを増すなか、国民学校五年生だった私は祖父母と浜甲子園に住んでいた。だが、近くに川西航空機の工場があり、敵の攻撃目標になるとして疎開命令が出た。

私と祖母は再婚した母の住む九州熊本へ。祖父は会社の責任者として大阪に残ることになった。間もなく会社が空襲で焼け落ち、祖父はひとり篠山へ帰った。戦禍のさなか、先祖の思いのこもった家屋敷をただ一人で守りながら、見続けていたかったに違いない。

祖父死亡の連絡を受けても、すぐには切符が手に入らなかった。山陽線は不通。やっと山陰線経由の列車で祖母と篠山に向かった。途中敵の艦載機の機銃掃射を受け、列車はストップした。乗客は近くの草むらに逃げこみ、その後まっ暗な列車で一夜を過ごし、やっとの思いで篠山に着いた。祖父はすでに親戚の手で遺骨になっていた。悲しみは深く、私は体調をくずし親戚の家で寝こんでしまった。終戦の知らせは祖母と親戚から聞かされた。やっと空襲の呪縛から解放され、体中の緊張がとけた瞬間であった。やがて元気を取りもどした私は祖母と復旧した山陽線で帰路についた。記憶は定かではないけれど広島に入った。とある駅に列車は止まる。窓から見えるホームの前方には、包帯をぐるぐる巻きにした人たちが杖や棒をたよりに立っている。ホームの脇に1台のバスが、かろうじて原形をとどめて焼け焦げていた。いくつもの電線が焼け落ち、垂れさがっている。電柱もくの字に曲がっている。

近くを流れる幅広い川原には牛が2頭倒れている。おなかのあたりが黒く丸く焦げている。何かわからない不気味さを感じた。原子爆弾が投下されたことは、あとで知ることになる。ここから先の鉄橋が破壊されていて、次の駅まで徒歩で渡れとのことだった。どうやって渡りきったのかはよく覚えてない。祖母と私は親切な青年たちに助けてもらって鉄橋の向こう側に到着した。渡りきる寸前、よつんばいになった時、リュックの口から袋が一つ落ちた。ひらひらと舞い落ち、やがて見えなくなった。

白日のもとに、わが身をさらしても敵からの攻撃はない。戦争は終わったのだ。安堵とうれしさがこみあげてきた。やっと我が家にたどりつき、一番に私のリュックから祖父の位牌を取り出し「ただいま」と手を合わせた。そして位牌に語りかけた。「もっと早くに戦争が終わっていたら、会えたのに、いっぱい、いっぱい、いろんなことをしてあげたかったのに」。

このようにして私の戦後が始まった。